

学生の学習意欲を高めるための授業開発の試み : 学生参加型の授業の設定を通して (岡田万嗣志村欣 一布川玲子十菱駿武教授退職記念号)

著者名(日)	百瀬 光一
雑誌名	山梨学院大学法学論集
巻	71
ページ	210-195
発行年	2013-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1188/00000512/

学生の学習意欲を高めるための授業開発の試み —学生参加型の授業の設定を通して—

百 瀬 光 一

はじめに

現在、日本の大学生の学習意欲の低下が問題視されている。この学習意欲の低下は、学生の授業態度にも大きく影響している。例えば牧野幸志は、授業中の私語、居眠り、携帯電話の使用などの授業マナーの悪さを挙げている¹⁾。学生の学習意欲の低下に関しては、さまざまな要因があるが、柳井晴夫・椎名久美子他は、大学教員の講義方法などにも課題があることを指摘している²⁾。社団法人私立大学情報教育協会も、学習意欲を高める授業の設定の重要性について指摘している³⁾。このことから、大学教員にとって、学生の学習意欲を高めるための授業改善は、今、大学で重要視されている FD 活動ともあわせ、大きな課題である。

学生の学習意欲を高めるための授業に関する先行研究として、柳井・椎名他と、曾山和彦、木野茂らの研究が注目に値する。柳井・椎名他は、学生を対象として実施した授業アンケートの結果をふまえ、学生の学習意欲を高めるための方策として、教員の一方的な講義でなく、少人数制で自分の考えや意見についてプレゼンテーション・ディスカッションする「演習（ゼミ）」の授業を指摘している⁴⁾。また曾山も、講義形式による受け身の授業ではなく、学生と教師、学生同士のかかわりが随所に盛り込まれた学生の参加型授業は、学生の学習意欲を高めるための一方策として有効

性があることを自らの実践研究をもとに示唆している⁵⁾。さらに木野は、教員と学生とのコミュニケーションを大切にした双方向型授業を提案している。そこでは、教員と学生との直接的で双方向的なコミュニケーションを心がけるとともに、グループ学習や参加型学習を設定することなどが重要であるとしている⁶⁾。

そこで本研究⁷⁾は、短期大学の学生を対象に、学生の学習意欲を高めるための授業開発について追究するものである。具体的には、柳井・椎名他、曾山、木野らの先行研究をもとに、プレゼンテーションやディスカッション、グループ学習を取り入れた「学生参加型の授業」を設計し、授業実践を通してその有用性について検証することにした。検証方法としては、授業での学生の行動観察（学生同士のコミュニケーション、表現物）と、授業後に学生に実施したアンケート調査の2点から分析することにした。

1 学習意欲を高めるための授業開発の試み

(1) 本研究で高めたい学習意欲

学習意欲とは、「生きる力」を育成する学力観からいえば、「自ら課題を見つけようとする力」、「主体的に課題に取り組もうとする力」、「最後まで課題を追究しようとする力」、「自分の考えや思いを表現しようとする力」などが挙げられる。これらは、小学校・中学校・高等学校の児童・生徒だけでなく、大学生にとっても求められる学力である。特に本研究では、その中の「主体的に課題に取り組もうとする力」、及び「自分の考えや思いを表現しようとする力」を高めるための授業開発について追究することにした。

(2) 本研究における授業開発のポイント

本授業は、幼稚園教諭と保育士を養成する A 短期大学で実践することにした。この大学では、充実した教育実習と保育実習にするために、「教育実習の事前事後指導」、「保育実習の事前事後指導」が重要科目としてカリキュラムに位置づけられている。本授業は、筆者が担当した1年の「教育実習の事前事後指導」の授業で実践した。この1年の「教育実習の事前事後指導」は、通年授業として計30回分（事前指導20回、事後指導10回、1回50分授業）の授業がシラバスで計画されている。本授業は、教育実習を終えた事後指導の中の7回分の授業で実践した。この7回分の授業は、先述した柳井・椎名他、曾山、木野らの先行研究をふまえながら、次の3点を工夫した。すなわち、①グループによる課題追究型の学習を組み入れること、②授業時間外での調査活動などにおける学生の負担を少なくすること、③調べたことをプレゼンテーションし合いながら、全体で共有する場を設定すること、の3点である。

①については、グループで課題を追究させることで、グループのメンバー同士による相互交流をさせたいと考えた。また、課題追究型の授業を設定することで、学生が主体的に課題を追究することを期待した。しかし、ここで留意しなければならないことがある。それは、グループ学習や課題追究型の授業がかえって学習者の学習意欲を低下させる場合があることである。このことについて高橋寿夫は、グループ学習で大切なことは、「互恵的な相互依存関係」が維持できることであり、グループの構成人数やグループの編成方法などが重要であるとしている⁸⁾。また片上英俊は、課題追究型の授業の短所として、作業内容がパターン化していくと、当初の授業の新鮮さが失われていき、学生の参加意欲が次第に減退していくという問題点を指摘している⁹⁾。これらの留意点をふまえ、本研究では到達目標

を明確化し、さらに意欲的にグループ追究がきるように、同じ課題意識をもつ者同士でグループを編成し、構成人数を4人とした。この4人編成は、高橋も好ましいグループ学習の構成人数の範囲として指摘している¹⁰⁾。さらにグループ追究していく場面では、積極的に教員側から学生にコミュニケーションを図りながら、個々の学生に対するケアを図っていくことにした。

②については、授業時間外における個々の学生の諸事情を勘案し、授業の中で調査活動が十分に行える時間を確保することにした。

③については、他のグループの前で調べたことをプレゼンテーションしたり、プレゼンテーションに対するフィードバックを加えたりしながら、お互いに情報を共有し合う場を設定した。

これらの3つの工夫点をもとに授業開発を行い、学生の学習意欲を高めようと考えた。

2 設定した学生参加型の授業の実際

(1) 授業の概要

本授業実践は、2009年11月17日から12月22日まで行った実践である。対象学生は、1年生の学生である（男子学生7名、女子学生46名、計53名）。

以下、7回分の授業の概要を紹介する。

① 第1回：教育実習（幼稚園実習）の振り返り

- ・ 11月に行った教育実習を『実習日誌』をもとに振り返り、次の保育実習に向けた自分の課題を洗い出す。

② 第2回：次の保育実習（施設実習）に向けたグループのテーマの設定

- ・ 課題別グループを編制し、テーマ設定と課題解決の調査方法を検討し

合う。

- ③ 第3回：グループごとによる課題追究
 - ・ グループごとによる調査活動を行う。
- ④ 第4回：調査活動のまとめ
 - ・ 調査活動のまとめとプレゼンテーションの準備を行う。
- ⑤ 第5～7回：プレゼンテーションとその振り返り
 - ・ グループごとに発表し、感想を述べ合う。

(2) 課題設定の授業の概要

この授業は、先述した第1回の授業である。内容は、2009年11月4日～12日まで行った教育実習（幼稚園）の振り返りである。各自が毎日書いた『実習日誌』をもとに振り返った。この振り返りから、自分の課題を発見させ、次の2010年2月22日～3月5日に行われる保育実習（施設実習）に向け、学生一人一人のモチベーションを高めていきたいと考えた。「教育実習の事前事後指導」の授業とは別に、「保育実習の事前事後指導」の授業もあるが、両者をリンクさせながら進めることにした。具体的には、教育実習の振り返りをもとにしながら、次の保育実習（施設実習）に向けた課題を設定しようと考えた。

1) 授業の目標

- ・ 『実習日誌』をもとに教育実習での自分の実習態度について振り返りながら、次の施設実習に向けた自分の課題を明らかにすることができる。

2) 授業の概要

授業の実際の流れは、次に示す図1の通りである。筆者による授業での行動観察や学生のノートをもとに、学生の発言・つぶやき、授業の概要について筆者がまとめた。なお、この授業では、筆者が担当する1年の「教育実習の事前事後指導」において、ノートに板書や授業後の感想をきちん

と書こうとしたり、自分の考えを全体の前で発表しようとしたりする意欲が見られない4名の学生（T生、H生、N生、W生）をそれぞれ異なるテーマのグループの中から抽出し、対象学生として追跡するとにした。

3) 授業で使用した「振り返りカード」

本時で使用した振り返りカードを次の図2で示す。図2は、筆者が学生が実際に書いたものをそのまま活字にしたものである。この振り返りカードは、A短期大学における教育実習の評価の観点を参考に、次に示す5観点で学生に自己評価させた。すなわち、①身だしなみ・挨拶について、②自己紹介について、③子ども達へのかかわりについて、④実習園の先生方とのかかわりについて、⑤実習日誌について、の5観点である。そして、これをふまえながら、次の項目「保育実習（施設実習）に向けて設定した自己課題」について考えさせた。

【教員の働きかけ】	【対象学生の動き】	配分
<p>・「この時間は、幼稚園実習での自分の実習態度についてじっくりと振り返り、次の施設実習がより充実したものになるようにします。」</p> <p>・「特に、毎日書いた実習日誌を使ってじっくりと振り返りたいと思います。毎日書いて下さった園長先生、指導教諭のコメントについては熟読しよう。」</p>	<p>T生：「初日からいろいろと失敗してしまった。」</p> <p>H生：「実習日誌を毎日書くのがとても大変だった。」</p> <p>N生：「身なりや挨拶について注意された。」</p> <p>W生：「言われたことはできたけど、自分から進んで動くことができなかった。」</p>	50分
<p>・「振り返りは、これから配布する振り返りシートの項目に沿って自己評価していきます。できるだけ具体的に書いていこう。」</p>	<p>T生：「私は緊張していて、実習園の先生方や子ども達に対して明るい挨拶ができませんでした。もっと笑顔と元気を心がければよかったです。」</p> <p>H生：「実習日誌の感想では、その日のねらいをもとに記録を整理し、事実が読み手に分かるように具体的に書くことができなかった。」</p> <p>N生：「初日に園の先生方から、前髪とズボンの丈の長さについて注意をされた。身なりについても子ども達のよきお手本となら</p>	

	<p>なければならないという自覚が足りなかった。」</p> <p>W 生：「指導教諭の先生が忙しい時などに、自分から『何かお手伝いすることがあります。』などと言い出すことができずに、ただ傍観していて気配りができなかった。」</p>	
<p>・「次の2月に行われる保育実習をより充実させるために、自分のよさや改善点等を含め、どんな課題をもって保育実習に望めばよいか考えよう。」</p> <p>・「振り返りカードに記入しよう。」</p>	<p>T 生：「次の保育実習では、私は明るい笑顔を忘れずに、好感がもてる実習生になりたいと思う。」</p> <p>H 生：「教育実習の時に比べてより充実した実習日誌が書けるようにしたい。」</p> <p>N 生：「園の先生方や保護者の方から好感がもてる身なりで保育実習を頑張りたい。」</p> <p>W 生：「子ども達だけでなく、積極的に先生方とも自分からかわれるような保育実習にしたいと思う。」</p>	50分
<p>・「次の時間は、課題を発表してもらいます。発表をもとに、同じ課題の者同士でグループを編制し、グループで追究していくテーマも設定します。」</p>	<p>T 生：「私と同じ課題をもった人は何人ぐらいいるのか。」</p> <p>H 生：「実習日誌に関する課題は、たくさんの方が設定したのではないかな。」</p> <p>N 生：「誰と一緒にグループになるのかな。ちょっと心配だな。」</p> <p>W 生「いつもの授業と違うので、なんかおもしろそうだな。」</p>	

図1 課題設定の授業（第1回の授業の概要）

(3) グループによる課題追究の授業の概要

この授業は、第2～7回分の授業である。第2回の内容は課題別グループを編制し、グループのテーマの設定と課題解決法について検討し合った。まず、前時で使用した振り返りカード（図2参照）の項目の「保育実習に向けて設定した自己課題」に書いた内容をもとに、共通する内容の者同士でグループを編制し、さらに、グループで追究していくテーマを設定した。次に、テーマの解決法について話し合い、協力して追究できるように作業分担を決めることにした。第3回の内容は、グループごとによる調査活動を行った。第4回の内容は、調査活動のまとめとプレゼンテーションの準備を行った。第5～7回の内容は、プレゼンテーションとその振り返りを

平成21年11月17日
1 年教育実習の事前事後指導 「教育実習（幼稚園実習）の振り返りカード」 氏名（ H 生 ）
教育実習を振り返って（自己評価）
①身だしなみ・挨拶について ・園の先生方から、髪長さについて指摘された。輪ゴムでしばるなどして髪をあげ、子ども達に豊かな表情が見せられるように心がけていかなければいけないということ学んだ。
②自己紹介について ・ただ名前だけを言うのではなく、子ども達をひきつけるために手遊びなどを用いながら自己紹介をすることができてよかった。
③子ども達へのかかわりについて ・年少、年中、年長のクラスにそれぞれ2日ずつ入った。どのクラスも1日めは緊張してしばらく立ちつくしてしまった。でも2日めは偏らないように全員の子に声をかけたり、遊んだり、話をする事ができた。
④実習園の先生方とのかかわりについて ・私は緊張して、実習園の先生方に対して明るい挨拶ができなかった。もっと明るい笑顔で挨拶ができればよかった。
⑤実習日誌について ・実習日誌の感想では、その日のねらいのもとに記録を整理し、事実が読み手に分かるように具体的に書くことができなかった。
次の保育実習（施設実習）に向けて
【保育実習に向けて設定した自己課題】 ・教育実習の時に比べてより充実した実習日誌が書けるようにしたい。 ・実習園の先生方に好感をもってもらえる実習にしたい。

図2 振り返りカード

行った。

1) 授業の目標

- ・ グループごとに協力しながら設定したテーマに関する調査活動を意欲的にを行い、さらに、調べたことを分かりやすくまとめ、プレゼンテーションすることができる。

2) 授業の概要

グループによる課題追究の授業の実際の授業の流れは、次に示す図3の通りである。ここでも筆者による授業での行動観察や学生のノートをもと

に、学生の発言・つぶやき、授業の概要を筆者がまとめた。ここでは、第2～7回の授業の流れのすべてを示す。すなわち、グループ編成及びグループごとによるテーマ設定からはじまって、調査活動、調査活動のまとめ、プレゼンテーション準備、プレゼンテーション、そしてプレゼンテーションの振り返りまでの授業の流れである。ここでの授業も同様に、本研究において特に学習意欲を高めたいと考えている、T生、H生、N生、W生の4名の学生を対象学生として追跡した。

【教員の働きかけ】	【対象学生の動き】	配分
【第2回の授業】 ・「前時に書いた振り返りカードの『保育実習に向けて設定した自己課題』を発表してもらいます。」	T生：「次の保育実習では、私は明るい笑顔を忘れずに、好感がもてる実習生になりたいと思う。」 H生：「教育実習の時に比べてより充実した実習日誌が書けるようにしたい。」 N生：「園の先生方や保護者の方から好感がもてる身なりで保育実習を頑張りたい。」 W生：「子ども達だけでなく、積極的に先生方とも自分からかかわれるような保育実習にしたいと思う。」	
・「みんなの発表を分類すると、大きく4つテーマができそうです。①身だしなみ、②実習日誌、③職員とのかかわり方、④自己紹介の4つです。同じテーマであっても1グループの人数を4名で編成するので、全部で13グループつくります。人数が多いところは、くじで4人ずつに分けます。」 ・「グループごとに、追究するテーマを設定し、さらにテーマを解決するための方法について話し合い、作業分担も決めよう。」	T生：自己紹介のグループ H生：実習日誌のグループ N生：身だしなみのグループ W生：職員とのかかわり方のグループ ・学生の自己課題をもとにテーマ別グループを編成した。具体的には、①に関するグループは3グループ、②に関するグループは3グループ、③に関するグループは4グループ、④に関するグループは3グループでき、計13グループが編成される。	50分
【第3回の授業】 ・「今日は、前回の授業でグループごとに分担した作業を協力して進めよう。」	【①に関するグループの概要】 教育実習での身だしなみについてお互いに指摘された点について出し合い、望ましい髪型や服装について図書資料をもとにモデル図を作成しながら検討し、模範となる実習生の身なりを実際に全体場で実演する。	50分

<p>【第4回の授業】 ・「今日は、グループごとに調査活動のまとめを行い、プレゼンテーションの準備をしよう。」</p>	<p>【②に関するグループの概要】 実習日誌をもとにどんな点を指摘されたのかを出し合い、図書資料や配付資料で調べながら、充実した実習日誌を書くためのポイントを全体の前で発表する。</p>	50分
<p>【第5、6、7回の授業】 ・「今日は、グループごとにプレゼンテーションをしてもらいます。また、発表後には振り返りも行います。」 「それでは1グループから順にプレゼンテーションをして下さい。」</p>	<p>【③に関するグループの概要】 インターネットや図書資料を使って、上司に好感がもてるかわり方について調べ、特に保育実習（児童養護施設、または障害者福祉施設）で想定される重要な場面における職員との適切なかわり方のマニュアルを作成し、それを全体場で実演する。</p> <p>【④に関するグループの概要】 どんな自己紹介が第一印象をアップさせるかについてインターネットや図書資料をもとに調べながら、「先生方用の自己紹介」、または「子ども達用の自己紹介」について検討し、模範となる自己紹介のやり方を全体場で実演する。</p>	
<p>・「各グループのプレゼンを聞いて、思ったこと・考えたこと・気づいたことなどをノートに書き、発表して下さい。」</p>	<p>・（前略）また、他のグループのプレゼンテーションもとても参考になった。特に「充実した実習日誌を書くための五つのコツ」はとても参考になり、次の保育実習ではより充実した内容にしたいと思った。（T生） ・第一印象をよくするための身だしなみについて調べたけど、身だしなみだけでなく、好感がもてる実習にするためには、他のグループのプレゼンテーションした内容のすべてを次の保育実習で生かしたいと思う。（後略）（N生） ・（前略）2グループのプレゼンテーションはとても参考になり、次の保育実習では実習日誌の内容を充実させるためのコツを意識して実習日誌を書いていきたいと思った。（W生）</p>	50分 × 3
<p>・「授業の感想を書こう。」</p>	<p>・（前略）みんなと助け合いながら協力して調査活動を進めることができてよかったです。（H生） ・（前略）他のグループのプレゼンテーションの内容もとても重要なので、それらのすべてを活かしながら次の施設実習で頑張りたいと思う。（N生）</p>	

図3 グループによる課題追究の授業（第2～7回の授業の概要）

3 本研究における学習意欲の検証

本研究では、対象学生として追跡してきた、T 生、H 生、N 生、W 生の 4 名の学生に対して行った授業での行動観察と、授業後に全学生に実施したアンケート調査の 2 点から、学生の学習意欲が高まったかどうか検証した。

(1) 授業での様子

ここでは、グループによる課題追究の様子と、各グループのプレゼンテーションが終了した後の振り返りの様子を紹介する。グループによる課題追究の様子については、いつも単独行動で他学生とのかかわりが見られない H 生が所属する 2 グループの様子を紹介する。プレゼンテーションの振り返りの様子については、T 生、N 生、W 生の 3 名の学生の感想発表の様子を紹介する。

1) グループによる課題追究の様子

筆者が行動観察をもとに追跡した、H 生が所属する 2 グループ（H 生、E 生、F 生、Y 生の 4 人で構成）の様子（学生同士のコミュニケーション、学生のつぶやき、調査活動の概要）を紹介する。

2 グループでは、教育実習で指摘された『実習日誌』の書き方の問題点について、どうすれば改善できるか図書資料や配布資料を使って調査活動を行った。H 生は、授業で使用している図書資料をもとに調べていく中で、「図書資料に実習日誌の書き方についてたくさんの留意事項が書かれていて、どこをまとめて書けばよいか分からない。」とつぶやいた。この時、配布資料で調べ学習をしていた E 生が「教育実習で指摘された実習日誌の書き方の問題点は大きくグループ分けすると、見た目のことと内容

に関わることの2つに分けられるから、その2つの観点に絞ってまとめていったらよいと思う。」とアドバイスした。このアドバイスを聞いて、H生と同じように図書資料を使って調べ学習をしていたF生は、さらに「私は見た目について調べていくので、HさんとYさんは内容に関わることについて調べていくように分担しようよ。」と提案した。このE生のアドバイスとF生の提案を受け、H生は「観点を持って調べた方が分かりやすく調べやすい。」と調べ方についての見通しをもちながら、Y生と一緒に、充実した実習日誌を書くために必要な内容面に関することについて主体的に調べ、まとめていった。

日常の大学生活では、H生とE生とF生とY生の4人は一緒に行動することがなく、挨拶以外はじっくりと会話をしたことがなかった学生達である。本授業では同じグループとなり、調査活動を進めていく中で、お互いにコミュニケーションを図りながら、主体的に課題に取り組む姿を観察することができた。このようなグループによる課題追究の様子から、H生の学習意欲が高まった姿を確認することができる。

2) プレゼンテーション後の振り返りの様子

次に、T生、N生、W生のプレゼンテーション後の感想発表の様子を紹介する。

- ・ 私は第一印象をアップさせるための自己紹介について調べ、次の施設実習で早速実践してみたいと思った。また、他のグループのプレゼンテーションもとても参考になった。特に「充実した実習日誌を書くための五つのコツ」はとても参考になり、次の施設実習ではより充実した内容にしたいと思った。(T生)
- ・ 第一印象をよくするための身だしなみについて調べたけど、身だしなみだけでなく、好感がもてる実習にするためには、他のグループのプレ

ゼンテーションした内容のすべてを次の施設実習で生かしたいと思う。
身なりだけでなく中身でも勝負したい。(N 生)

- ・ 私は教育実習で実習日誌を書くのにとっても苦勞した。どのように書けば分かりやすくなるのかあまり理解できていなかった。でも 2 グループのプレゼンテーションはとても参考になり、次の施設実習では、実習日誌の内容を充実させるためのコツを意識して実習日誌を書いていきたいと思った。(W 生)

この 3 名は、いずれも自ら挙手して感想を発表したのではなく、教師から指名されて、ノートに書いたことをそのまま発表した。しかし、これまでの授業とは異なり、自分の考えをしっかりとノートにまとめ、表現することができた。このような取り組みの様子から、T 生、N 生、W 生の学習意欲が高まった姿を確認することができる。

(2) 授業後に実施したアンケート調査

授業終了後に、授業に関するアンケート調査を行った(2009年12月22日実施)。受講人数は53名であるが、実際にアンケートに答えた学生は51名であった(2名欠席)。授業評価は、1:たいへんわるい、2:わるい、3:ふつう、4:よい、5:たいへんよい、の5段階で行った。

- ① グループ学習で取り組んだ課題は意欲的に取り組めるものであったか。
(1:0名、2:0名、3:4名、4:19名、5:28名)
- ② グループの構成人数は適切であったか。
(1:0名、2:0名、3:2名、4:24名、5:25名)
- ③ プレゼンテーションという方法は適切であったか。
(1:0名、2:0名、3:6名、4:20名、5:25名)

④ 次の施設実習に対する自分なりのめあてをもつことができたか。

(1 : 0名、2 : 0名、3 : 0名、4 : 7名、5 : 44名)

⑤ 授業の中で、印象に残ったことを書いて下さい。

(プレゼンテーション : 39名、グループ学習 : 32名、調査活動の時に先生からいろいろとアドバイスしてもらったこと : 18名、先生に名前を覚えてもらったこと : 13名¹¹⁾、重複回答あり。)

アンケートの質問①で「よい」「たいへんよい」と答えた学生は47名、質問③で「よい」「たいへんよい」と答えた学生は45名、質問⑤でプレゼンテーションを挙げた学生が39名、グループでの調べ学習を挙げた学生が32名という結果となった。この結果から、グループによる課題追究型の学習を取り入れ、さらに、調べたことを他者に向かって表現するプレゼンテーションを設定したことは、学生の主体的に課題に取り組もうとする力や自分の考えや思いを表現しようとする力を高める上で有用性があると解釈することができる。また、グループの編成人数を同じ課題をもつ者同士の4名で編成したことも主体的なグループ学習につながった要因の一つであると、質問②の結果からうかがうことができる。さらに、質問④からは、この授業を通して、次の施設実習に対する自分なりのめあてを全員の学生がもつことができたことも確認することができた。

以上より、アンケート調査からも、本授業を受講した学生の学習意欲が高まった姿を確認することができる。

おわりに

本研究では、幼稚園教諭と保育士養成の短期大学の1年生を対象に、学生の学習意欲を高めるための授業開発について追究した。具体的には、プ

レゼンテーションやディスカッション、グループ学習を取り入れた「学生参加型の授業」を設定し、授業実践を行った。開発した授業について、学生の授業での行動観察（学生同士のコミュニケーション、表現物）と、授業後に学生に実施したアンケート調査の2点から検証した結果、対象学生として追跡したT生、H生、N生、W生の4名の学生をはじめとする受講した学生に、学習意欲が高まった姿を確認することができた。このことから、本研究で開発した授業は、学生の学習意欲を高める上で有用性が高いことを検証することができた。

今回の研究は、短期大学の学生を対象に行ったものである。今後は、4年制大学の学生を対象とした実践研究も積み重ねていくことが求められる。今後の課題としたい。

注

- (1) 牧野幸志「大学生の高校時代の学習態度に関する教育心理学的研究」『高松大学紀要』37、2002年、p.74。
- (2) 柳井晴夫・椎名久美子他「大学生の学習意欲に等に関する調査研究」『大学入試センター研究紀要』No.32、2003年、p.112。
- (3) 社団法人私立大学情報教育協会「平成19年度私立大学教員の授業白書」2008年。
- (4) 前掲書(2)、pp.114-115。
- (5) 曾山和彦「参加型授業を受講した学生の満足度と学習意欲に関する考察」『名城大学教育年報』第3号、2009年、pp.13-20。
- (6) 木野茂「教員と学生による双方向型授業—多人数講義系授業のパラダイムの転換を求めて—」『京都大学高等教育研究』第15号、2009年、pp.5-12。
- (7) 本研究は、2009年より継続して行っているものである。なお、本稿は、日本教材学会第24回研究発表大会（2012年10月21日 於：福山大学社会連携研究推進センター）の発表資料を加筆修正したものである。
- (8) 高橋寿夫「授業の活性化に向けて—グループによる学生参加型授業の実践的考察—」『関西大学外国語教育フォーラム』第7号、2008年、pp.25-27。
- (9) 片上英俊「大教室での問題解決型授業の試み—2007年度前期『文化人類学A』—」『青山スタンダード論集』第3号、青山学院大学青山スタンダード教育機構、

2008年、pp.35-37。

- (10) 前掲書(8)、p.27。高橋によれば、4名～6名までが適切な1グループの人数であるとしている。
- (11) 今回は、本稿1の(2)「本研究における授業開発のポイント」でも述べた通り、積極的に個々の学生とのコミュニケーションを図るように努めてきた。その結果、受講した全学生の名前（苗字）を覚えることができた。その成果が、このアンケートの結果にも表れたと考察できる。